

平成25年度

奈良県公立学校優秀教職員  
表彰実践事例集

平成26年2月

奈良県教育委員会

# 目 次

## 【小学校】

### 学習指導の部

- 1 社会にかかわる力を育てる小学校社会科学習を目指して  
～地域の「ひと・もの・こと」を大切にした学習材の開発・実践を通して～  
葛城市立新庄小学校 教諭 仲川 道興 1

### 生徒指導の部

- 2 校門での登下校指導を通じた生徒指導について  
大和郡山市立平和小学校 教諭 清水 良亮 3

### 学校体育の部

- 3 なかまとのかかわりを大切にした体育学習による体力向上の取組について  
三郷町立三郷北小学校 教諭 片山 登志男 5

### 特別支援教育の部

- 4 特別支援教育コーディネーターとして  
大和郡山市立片桐西小学校 教諭 大庭 譲治 7
- 5 LD・ADHD等通級指導教室における教室運営と指導について  
香芝市立下田小学校 教諭 芳倉 優富子 9

### 学校教育目標の具体化の部

- 6 「地域とともにある学校づくり」～二上コミュニティの取組～について  
香芝市立二上小学校 教諭 浅井 信成 11
- 7 保小連携について～かかわり合い、育ち合うつながりを目指して～  
五條市立北宇智小学校 教諭 芝田 峰子 13
- 8 音楽教育の実践及び学校運営推進の任務推進について  
五條市立宇智小学校 教諭 植田 辰哉 15

## 【中学校】

### 生徒指導の部

- 9 生徒会活動と社会貢献活動の活性化による規範意識の向上  
奈良市立三笠中学校 教諭 吉川 守 17

### 進路指導の部

- 10 進路指導について  
生駒市立緑ヶ丘中学校 教諭 奥村 圭子 19

### 学校体育の部

- 11 体力向上を推進し、創意工夫した保健体育の授業を目指して  
宇陀市立榛原中学校 教諭 桐生 悦実 21

### 部活動の部

- 12 個性を生かし、自ら進んで取り組む部活動指導  
橿原市立光陽中学校 教諭 東 美孝 23

### 学校教育目標の具体化の部

- 13 生徒の判断力を向上させ、自ら行動できる防災教育  
～生き抜いて、助けられる人から助ける人へ～  
五條市立五條中学校 教諭 尾崎 和弘 25

## 【高等学校】

### 学習指導の部

- 14 本県公立高校におけるSSH事業の推進について  
奈良県立奈良高等学校 教諭 森田 好博 27

### 生徒指導の部

- 15 大規模校としての学校、生徒の実態に即した生徒指導について  
奈良県立平城高等学校 教諭 山口 浩 29

### 進路指導の部

- 16 キャリア教育の実践について  
奈良県立登美ヶ丘高等学校 教諭 米倉 信岳 31

## 分野番号 1 小学校 学習指導の部

社会にかかわる力を育てる小学校社会科学習を目指して  
～地域の「ひと・もの・こと」を大切に学習材の開発・実践を通して～

葛城市立新庄小学校 教諭 仲川 道興

### 1 実践内容

小学校社会科の究極の目標は、公民的資質の基礎を培うことにある。そのことに加え、現行学習指導要領からは、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことが明示された。



昭和61年に奈良県小学校教科等研究会社会科部会専門委員となって以来、上述主題のもと、「社会への参画力」の基礎を児童に身に付けさせるべく研究実践を行ってきた。地域の教育力活用や地域社会への積極的なかわりとともに、地域の「よさ」の発信に取り組んだ実践を以下に略述する。

#### (1) 歴史学習や郷土学習における博学連携について(3年、6年)

小・中・高の各学習指導要領において、博学連携や郷土の伝統文化に対する教育の必要性が強調されているが、学校の博物館活用は停滞している。

平成12年11月の葛城市歴史博物館開館当初（開館当初の名称は新庄町歴史民俗資料館）より、市内小中学校教職員の代表として博物館協議会委員を委嘱され、小中学校の博物館活用を啓発・推進する役割を担うことになった。同館の魅力や活用の大切さを市内教職員に伝えるとともに、博物館活用をはじめとする博学連携について、以下の実践に取り組んだ。



- 3年 葛城市歴史博物館学芸員の出前講話 「葛城市のすてき」(総合的な学習の時間)  
同館の見学 「昔の暮らし」 (社会科)
- 6年 同館学芸員による出前授業 「土器をつくろう」 (図画工作科)  
同館の見学 「古代の葛城市」 (社会科)  
同館学芸員との「協働」授業 布施城と「ほらがとうげ洞ヶ峠じゅんけいの順慶」 (社会科)

※葛城市中学校郷土読本「布施城」(仲川執筆)より抜粋

#### ① つついじゅんけい筒井順慶ろうじょうとともにろうじょう籠城戦に耐え抜く

奈良県においても、戦国時代は戦いの連続でした。奈良の戦国武将の代表格が、筒井順慶と松永久秀です。布施氏は、順慶方の有力武士として戦いに明け暮れました。

織田信長の援助を得た久秀との戦いに苦戦を強いられた順慶は、最後の砦として布施城での籠城戦に挑み、1565年ごろから数年にわたりその強固な守りで耐え抜きました。

ふもとの布施郷は総勢10,000人以上の松永・織田連合軍により、1568年に焼き払われましたが、布施城は一度も落城することはありませんでした。

## (2) 地域素材を取り上げた産業学習材の開発について(3年、5年)

社会科の授業設計において、身近な地域素材の学習材化が児童の学習の深化・充実にとって大切である。3年では、地域の産業に対する理解とともに、郷土に対する誇りをもたせることを意識した。5年では、その産業に携わる「人」の営みに焦点を当て、キャリア教育の視点も踏まえるとともに、「地域発」の産業学習として全国の特徴的な事例(北海道別海町の酪農)へとつなぐように工夫した。以下に示す5年の実践事例は、平成17年度全国小学校社会科研究協議会研究大会奈良大会において研究発表を行ったものである。

3年 地域で作り出すもの 「日本一!葛城の二りんぎくづくり」

「奈良県で最初!葛城のらくのう」

5年 我が国の農業 「地域の人たちが支える葛城の酪農・日本の酪農」

## (3) 地域を取り上げた教育放送番組やマルチメディア教材の制作にかかわって

小学校3、4年の社会科学習を中心に、奈良県教育委員会が制作する以下の番組等の制作に携わった。葛城市の事例を地域の学習材として取り上げることで、郷土への誇りとともに児童の学習意欲の向上にも役立った。

3年・社会科教育放送番組「てくてく歩いて地図づくり」

・なら教育番組(学校へようこそ)

「話す・聞く・書く・読む」～確かな学力を～

4年・社会科教育放送番組「あたたかい土地のくらし」

・小学校社会科マルチメディア教材

「山ろくを生かす葛城市」「山にかこまれた野迫川村」



## 2 成果及び課題

(1) 地域素材の学習材化によって、児童の地域理解や学習の深化、追究意欲の向上に非常に効果があった。地域の生産活動に携わる人々の郷土を愛する姿や、懸命に仕事に打ち込む姿にもふれることができ、地域の社会的事象に対する共感的な態度も育むことができた。

(2) 現在、前述の奈良県小学校教科等研究会社会科部会事務局長として、本県の社会科教育に携わっている。「社会科＝覚えるだけの教科」としてのイメージを払拭し、「社会にかかわることの楽しさ、大切さ」をより多くの先生方に伝えるべく、今後も様々な機会を通して社会科の魅力を発信し続けていきたい。

## 3 その他参考になる事項

奈良県立教育研究所ホームページより教育番組「学校へようこそ」

<http://www.nps.ed.jp/nara-c/multi/bangumi/>

奈良県立教育研究所ホームページより小学校マルチメディア教材「奈良県のくらし」

<http://www.nps.ed.jp/nara-c/multi/kyouzai/>

葛城市ホームページより「葛城市歴史博物館」

<http://www.city.katsuragi.nara.jp/>

葛城市中学校郷土読本「郷土葛城を訪ねる」 平成24年3月 葛城市教育委員会

## 1 実践内容

### (1) はじめに

あいさつとは、人間同士のコミュニケーションにおける基本である。しかし、「元気のいいあいさつをしよう」とか「笑顔であいさつしよう」などと児童に話すだけでは、あいさつの大切さはなかなか伝わらない。基本的な生活習慣は、私たちの態度や行動の基本となるもので、その基盤は家庭生活の中で養われるものである。したがって、あいさつや身だしなみ、言葉遣いなどの礼儀作法については学校生活の中だけでなく、家庭と連携して身に付けることが大切である。



「あいさつ」の「あい」は心を開いて相手に言葉を投げかけること。そして、「さつ」は心を開いて受け入れ、相手に言葉を返すことである。登校の途中で出会った友人とあいさつを交わすことによってお互いがいい気分になったり、「今日もがんばるぞ」とやる気がわいたりしてくる。声を出すのは、自分に対して気合を入れる、元気や勇気を出すなど、自分を動かすためである。そしてもう一つの意味が、周りの人に元気を与える、雰囲気盛り上げるといふ、自分以外の人を動かすということである。小学校の早い段階から家庭でのあいさつの励行を心がけるとともに、学校においてもあらゆる教育活動の中であいさつの大切さについて理解させ、実践力を養うことが必要である。

### (2) 本校の登校の様子

本校では毎朝、各分団で集まって分団登校をしてくる。校区が広いので、どうしても登校中に、分団の列が長くなってしまふ。また、歩くスピードも学年によって違うので、分団内のトラブルも多い。そのようなトラブルに対応して、休み時間に分団毎に集めたり、個々に呼び出したりといった指導を行っている。しかし、これらの指導は児童の行為に対する後追い指導となることが多い。行為の後追い指導だけでは、こういったトラブルはなくなることはなく、繰り返されることとなる。児童一人一人の日々の様子を把握し、適切な指導を行っていくことによって、児童の気持ちに寄り添ったよりよい指導になると考える。そこで、期間限定で行われていた校門でのあいさつ運動を常時行うことで、児童の様子を把握する一つの手立てとしていった。



### (3) あいさつ運動

朝夕、校門で登下校指導をしていると、子どもたちの様子の変化を把握することができる。例えば、日ごろ元気な子どもが肩を落として登校してくると、何かあったのかなと声をかけることができる。また、元気に登校してきたはずの子どもが、元気なく下校していくと、学校で何かトラブルでもあったのかと、担任と話をすることもできる。このように、日ごろの些細な変化を見逃さないことで、児童理解を一層深めることができる。また、子どもたちは自らの悩みを訴え、相談することもできるようになり、教員との信頼関係も生まれてくる。

こうした日常的な児童との交流が問題を未然に防ぐとともに、問題が発生した場合には適切な対応をとることができるようになる。また、問題によっては、養護教諭やスクールカウンセラーなどの協力を仰ぐこともできる。

## 2 成果及び課題

校門での登下校指導を行うことで、子どもたちからのあいさつが増えてきた。子どもたちの笑顔も増え、担当学年だけでなく、全校児童の顔も覚え、話しかけてくる児童が増えてきた。また、気持ちのよいあいさつができていた児童に対して、「大きな声で気持ちいいあいさつだね」「先生も元気になるよ」など声をかけることで、その周りの児童のあいさつが変わってきた。叱るのではなく、本校



のスローガンの一つである「いいとこ、みつけ」、褒める、認めることを通じて児童が変容していく姿がみられる。しかし、中にはまだまだ恥ずかしがって声を出してあいさつができない児童もいる。そのような児童に対しては、教員から声をかけ続けていくことを大切にしていきたい。

登下校中や学校でのトラブルを少なくしていくためには、あいさつを定着させていくことが何より大切であると考えている。あいさつが習慣化するまでには多くの時間を要するが、決してあきらめず、粘り強く指導を続けることが重要であることを改めて感じている。

今年からは、本校が取り組んでいる学校コミュニティをより充実させ、地域の方々の参画をいただき、ともに協働してあいさつ運動を行っている。

登下校指導を継続して行い、保護者や地域の方々と顔を合わせたり、地区懇談会で意見を交換したりして、いただいた情報を全職員で共通理解しなければならないと感じている。地域や家庭とのつながりを大切にする中で「地域住民の声を大切にする学校」・「地域に拓かれた学校」にしていきたい。地域に愛される児童、そして、児童が安心して生活できる地域であるようにしていくことが大切である。



高学年の児童が低学年の児童にアドバイスできる時間を設定した。

### ③ 保健部

校内の健康安全についての様々な統計をとり、その結果を基にして、児童や家庭への啓発に努めた。

## 2 成果及び課題

体育科を中心として各学年が公開授業を実施し、授業実践をする中で、体づくり運動や陸上運動、器械運動での個に応じた指導や支援の在り方、更に教材や教具、補助具の工夫などについて研修することができた。その結果、児童がめあてをもって互いにかかわり合い、アドバイスし合いながら学習する姿がみられるようになった。その成果は、平成25年度奈良県小学校体育研究会前期研究大会会場校として、公開授業で披露することができた。今後も継続した教科体育での授業の充実を推進していきたいと考える。

また、作成した補助教具や教材を、体育教材や教具の保管スペースを設け整理することで、他の学年や学習でも活用できるようになった。その教材や教具を有効に活用するためにも、年間指導計画を更に見直し、各学年の指導の時期や場所も工夫していきたい。

体育的活動では、二学期には全校で、かけ足集会、三学期には縄跳び集会の時間を設定し、児童が自己の体力向上に向けて挑戦する機会とすることができた。また、全校縦割活動も推進し、特に縄跳び集会では、縦割班ごとにグループになって跳ぶことで高学年の児童が低学年の児童に教える姿もみられ、縦のつながりも出てきた。



今後、更に体力テストの結果を分析し、本校児童の課題を克服するような運動を、年間を通じて行うことも必要ではないかと考える。また、健康や食に関する内容や生活の仕方などについても、保護者との連携を取りながら、更なる取組も必要であると考える。

## 1 実践内容

奈良県教育委員会指定研究員に2度指定され、LDプロジェクトチームとして冊子の作成に参加した。また、平成14年に特別支援教育士スーパーバイザーを取得し、発達障害についての研究・実践に研鑽を積んでいる。



### (1) 校内支援体制づくり・・・校内委員会

前任校において、特別支援教育部主任、並びに、コーディネーターとして、校内委員会を立ち上げ、特別支援教育の活性化と校内支援体制づくりを行ってきた。また、町内の各校園所の特別支援教育全体の活性化を図るために、町立幼稚園・保育所・2つの小学校・1つの中学校と、教育委員会・保健センター・療育教室・特別支援学校が集まり、2か月に1回の支援連絡会議を立ち上げた。また、町内の支援を要する子どもたちについての情報交換を行いながら、互いの資質の向上、校園所の支援体制の充実に努めた。

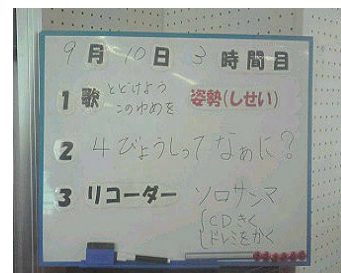
平成24年度に現任校に転任し、管理職の理解と支えを得て、ただちに特別支援教育コーディネーターとして教職員からの教育相談を受け始めた。加えて、“教育相談部会”を開設し、学級を運営する上で日々発生する様々な問題に対して、気軽に相談に応じてきた。また、教務主任と連携しながら、必要に応じて校内支援体制の構築を目指した。

2年目の本年度は、本校の実態に合わせて、生徒指導部・人権推進部・特別支援教育部が合同する「校内支援委員会」を立ちあげ、校内組織としての支援体制の定着を図った。「校内支援委員会」は、1学期には月2回、2学期には月1回程度開催し、継続的に校内支援体制等について検討した。その結果、校内で情報が共有され、支援体制づくりが一定の成果を見せるようになってきた。ここで話し合われた内容については、必ず翌日の職員打ち合わせにて報告し、全体の共通理解を得ている。

### (2) 校内研修・教育相談

本校は平均年齢が30歳代前半と大変若い教職員集団であり、個々の教職員を見ると、情熱があり、また、熱心である。しかし、特別支援に関する知識と経験が乏しく、不安を抱え込みやすい者が多いことから、先を見通して系統的にじっくり構えて取り組むことが難しい状況にあった。そこで、随時「コーディネーター通信」を発行して、最新情報の提供に力を入れてきた。また、校内研修を継続的に行うことで、児童理解を深め、個に応じた支援の在り方をともに考えながら取組ができるようになってきた。特に、支援を要する児童は自尊感情が低下しやすいので、人権教育部と連携し、すべての学級で学年開きの際に、奈良県の人権教育教材「なかま」低学年の教材である「かお」に取り組むこととした。学級内・学校内で、日常的に用いられる言葉の「とげ」は、相手の心を傷つけるものであることに気付かせ、あたたかい言葉を使う肯定的な人間関係をつくるために「ふわふわことば・チクチクことば」の考え方を定着させ、言語環境を整えることを通して、支援を要する児童を含むすべての児童の自尊感情を守ることに継続して取り組むこととしている。また、本年度よりユニバーサルデザインの授業づくりに取り組んでいる。見通しがつかないと不安症状を呈する児童がいることに配慮する取組もみられるようになってきた。

その一例として、右の写真のように授業内容を示したものを教室前面に提示することで、子どもたちは1時間の授業の流れが分かり、落ち着いて取り組むことができるようになってきた。その結果、コーディネーターとして、日常的に、教職員の個別の教育相談にも気軽に応じることができるようになってきた。児童の理解の仕方や、支援の仕方等をアドバイスすることで、教職員の様々な負担の軽減に当たっている。また、担任からの要請を受けて、保護者との教育相談にも同席し、保護者や担任の声に耳を傾け、当該児童の実態把握、課題の焦点化、具体的な環境の整え方や支援の仕方等を提案し、継続的に相談しながら取り組んでいる。担任と協力して家庭・学校の信頼関係の構築に力を入れている。



(音楽の授業)

### (3) 特別支援学級での支援体制

年々増えつつある在籍児童数や多岐にわたる障害特性に対して、特別支援学級担任はチームとして取り組んでいく必要がある。そこで、毎週担当者会議を開き、各自の課題を持ち寄って絶えず検討会議を開き、支援の在り方と教材研究に当たっている。そして、在籍児童全員の「個別の指導計画」をチームとして作成し、個に応じた支援の充実に当たり、子どもたちの成長を皆で見守るようにしている。今後も互いに情報交換を密にしながらか評価・支援に反映していくよう努めていきたい。

### (4) 幼保・小との連携

幼稚園・保育所と小学校との連絡会は、学期に1度、定期的に行われており、情報交換の場となっているが、それに加えてコーディネーターとして夏期休業中に幼稚園・保育所を訪問し、児童観察や職員との情報交換を行うようにしている。幼稚園・保育所に多く足を運ぶことで、保育者の疑問や悩みに対応するように心がけている。幼稚園に対しては、夏期休業中に園内研修として特別支援教育研修、発達障害の理解と支援の在り方についての研修を継続的にもつようになった。今では、年長児クラスはもとより、年中児クラスから継続的に見守ることができるようになってきた。

昨年は本校の特別支援学級入級希望園児の保護者には、必ず学校の授業風景を見学してもらい、教育相談を随時行ってきた。また、本年度は入級はしないが気になる我が子のことについて、小学校側に伝えておきたい、理解を求めたいという思いをもって保護者が入学前に小学校を訪れるようになってきた。入学前から気軽に相談できる雰囲気づくりを行うことで、保護者の不安の解消に努めている。今後も幼・保と協同して小学校へのスムーズな移行支援ができるよう取り組んでいきたい。

## 2 成果と課題

- ・特別支援教育における支援の手立てを通して、ユニバーサルデザインの授業づくり、校内支援委員会の活性化、教職員へのコンサルテーションは、学校全体の活性化に有効である。
- ・特別支援教育において、特に行動障害についての的確な児童理解が必要である。そのためにはLD・ADHD・自閉症スペクトラム等の発達障害の見極めに加え、第4の発達障害といわれる虐待によるADHD様児童の見極めも必要である。
- ・特別支援教育において、対象児童への教育的アセスメントと具体的な支援の提示と取組は当然であるが、保護者へのカウンセリングによる信頼関係の構築という両輪が必要不可欠になる。

## 3 その他参考になる事項

大和郡山市立片桐西小学校ホームページ <http://www6.ocn.ne.jp/~katanisi/>

## 分野番号5 小学校 特別支援教育の部

### LD・ADHD等通級指導教室における教室運営と指導について

香芝市立下田小学校 教諭 芳倉 優富子

#### 1 実践内容

平成19年度より、これまでの「障害児教育」から「特別支援教育」が開始された。

通常の学校・学級においても「教育上特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対し、……障害による学習上又は生活上の困難を克服するための教育を行うものとする」（学校教育法第81条第1項）と規定された。



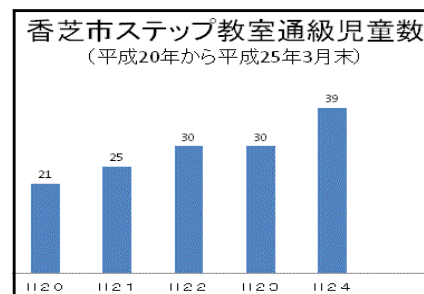
特に学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、高機能自閉症などの「発達障害」に対して教育支援を行うことが求められ、本市においても「ことばの教室」に続き、平成19年度に「LD・ADHD等通級指導教室（通称ステップ教室）」が開室された。平成20年度より本通級担当教員として取り組んできた通級指導教室の運営と指導の一考察を報告する。

##### (1) 教室の位置付け

本通級指導教室の対象地域は、現在、香芝市全域の小学校（10校）である。通級指導教室への通級に当たっては、就学指導委員会の教育相談を経て通級の可否が決定されているが、教育相談の時期以外は、香芝市就学指導委員会の専門相談員でもある通級指導担当教員が、教育委員会の承認の下、決定している。

本通級児童の障害種別は、自閉症スペクトラムが最も多く、次いで学習障害、ADHDである。自閉症スペクトラムやADHDの児童は、その特性から読み書きの弱さを併せもつ児童もいるため社会性スキルの指導、生活支援とともに読み書き、学習支援が主な指導内容となることが多い。

本通級児童数は、右の表にもあるように平成19年度13名から平成24年度39名と増加傾向にある。



##### (2) 指導の実際

本通級指導教室では、指導内容や支援方法を決定する際、心理・発達アセスメントを行い、認知特性の把握をする。さらに、児童に必要な検査や評価を行い、個々の児童のニーズを決定し、それに合わせた指導を工夫している。個々の児童がもっている困難さの軽減を図り、在籍学校生活や学習活動に楽しく参加できるようになることを目指している。

###### ① ソーシャルスキルトレーニング（SST）

- ・対人関係や場面理解等に困難さをもつ児童を対象に、低中高学年別で対人関係に必要な具体的スキルを学習し、般化を目的としたグループ指導を行う。
- ・学年を越えた集団のスキルの般化場面として「夏遊び大会」「クリスマス会」「ステップ卒業式」等の企画運営を児童中心で行う。

## ② 読み書き困難への指導（学習支援）

- ・認知特性に合わせた文字指導を行う（教材や覚え方の工夫・iPadの活用）。
- ・認知特性に合わせた学習スタイルを提案し、児童自身が自分に合った学習スタイルを身に付けられるように指導し、支援する。
- ・読み書きの困難な児童に対してD A I S Y教科書やD A I S Y図書を活用する。

## ③ 学習の補充

- ・担任と連携をとりながら予習や復習、宿題の質や量の調節などの提案をし、在籍学級での学習活動において達成感をもてるように支援する。

## (3) 教育相談とコンサルテーション

- ・担任との懇談（通級担任者会・担任個別懇談）や個別の指導計画の作成を行う。
- ・ペアレントトレーニング（保護者グループで実施）で親子の関係改善を図る。

## 2 成果及び課題

児童個々の特性等に起因する課題に対して、在籍学級担任や関係機関等と連携をもち、指導を行ってきた。在籍学級での行動の改善や読み書きの向上、自尊感情の向上等の成果が現れている児童も多い。しかし、児童がもつ特性の重複等によって、指導が長期化する児童もあり、指導する児童数の限界、指導内容や方法の再考など課題も多い。

昨年度行った本通級保護者アンケートで、保護者は、「通級で指導を受けてとてもよかった」「我が子を理解できるようになり、子どもへのかかわり方が変わり、子どもも安定した」等々と回答している。様々な困難を軽減していくためには、指導とともに保護者の理解が大切であり、それらの相互作用で児童が苦手さをもちながらも、安定した学校生活や家庭生活を送ることができるのである。

本通級指導教室での指導を受け、児童が「こんなことを教えてくれるとこ、あったんや」「もっと早く教えてほしかった」などと自分の苦手さを認めながらも、前向きに学校生活や学習に取り組むようになっていくことが、指導者としての最大の喜びである。

また、卒業生が二次的な困難さをもたずに高等教育を受け始めている。将来、社会においてよりよい生活を送っていくために、発達障害児の児童期に育てておくべき力がどのようなものであるかを、児童や保護者とともに考えていきたい。そして、より質の高い通級指導教室の運営や効果の高い指導方法の追求のために、更に専門性の向上に努めたい。

## 3 その他参考となる事項

- ・D A I S Y教科書・D A I S Y図書とは、印刷物の読みに困難をもつ児童生徒などが教科書や図書を読むための支援ツール。

【問い合わせ】日本障害者リハビリテーション協会 情報センター D A I S Y担当宛  
TEL : 03-5273-0796 FAX : 03-5273-0615 E-Mail : daisy\_c@dinf.ne.jp

- ・参考図書 「ペアレント・トレーニングガイドブック」活用のポイントと実践例  
岩坂英巳編著（奈良教育大学特別支援教育研究センター）

## 分野番号 6 小学校 学校教育目標の具体化の部

### 「地域とともにある学校づくり」～二上コミュニティの取組～について

香芝市立二上小学校 教諭 浅井 信成

#### 1 実践内容

本校は、平成24年度に県教育委員会より地域教育力の推進のためのモデル校に指定されたこともあり、学校を核とした地域コミュニティ（以下「二上コミュニティ」という）の再構成を図る取組を始めた。これまで、学校と保護者・地域住民が様々な事業を通じて培ってきた「連携」という関係を発展させ、保護者や地域住民が学校運営に「協働・参画」して、学校や地域の課題解決に向けた仕組みづくりを構築する取組をスタートさせた。まず、学校の組織である校務分掌の見直しを図り、校務分掌の中にコミュニティ推進委員会を立ち上げ、地域と学校を繋ぐ中心的な役割を担う推進役として教職員からコーディネーターを配置した。次に、これまでの取組を点検し、学校と家庭・地域がコラボレーションする「協働」によって教育を「共創」する（ともに創り出す）ことで、停滞あるいはマンネリ化していた取組を活性化させることを考えた。その上で、農園での生産活動、挨拶運動、食育推進、読書活動、運動会の改革、安心安全運動といった内容を基にして、教職員、保護者、地域住民等の「参画・協働」による「二上（ふたかみ）コミュニティ」を立ち上げた。



##### (1) 二上コミュニティ推進委員会の構成員

地域の自治会長、老人会の役員、育友会役員、地域住民、市教育委員会関係者、県教育委員会関係者、学校職員

##### (2) コミュニティ推進委員会各部会編成

本校の子どもの実態かつ奈良県教育の課題を踏まえ、3つのプロジェクトと6つの部会で取組を行う（平成25年度）。

- ① 学力向上プロジェクト…基礎学力向上部会、読書活動部会
- ② 生活力向上プロジェクト…生活安全部会、勤労生産部会
- ③ 健康力向上プロジェクト…体力向上部会、食育健康部会

##### (3) 特徴的な活動内容（平成24年度の取組より）

###### ① 運動会の実施方法

本校では、近年、急激な児童数（現在807名）の増加があるものの、運動場は狭く、また観覧マナーも含め、運動会の安全な実施そのものが難しい状況となり、その在り方が大きな懸案事項となっていた。学校行事とはいえ、その性格上、学校だけでは容易に変更できにくく苦慮していたところ、「二上コミュニティ」で熟議いただくことができた。運動会での保護者や地域の方の観覧方法やマナーの在り方について、一定の方向が示され、保護者に周知した。実施前は反対意見等もあったが、運動会当日の観覧は育友会役員の全員の協力の下、立ち見席及び入れ替え制にて実施し、実施後のアンケートでは、概ね好評であり、中には「もっと早くから取り組んでもよかった」という意見もいただけた。



## ② 食育推進

オープンスクールを利用し、食育に関する講演会を開催し、児童とともに保護者の方々に食育について考えていただく機会を設定した。また、学校（給食）と家庭（朝・夕の食事）が連携して取り組める内容を考え、食事のマナーでの課題を検討し、「①姿勢を正して食べる ②食器に手を添える ③残さず食べる」の3点を重点に『チャレンジ食事マナー週間』の取組を行った。

## ③ 安心・安全運動

校区の子どもたちにかかわる安心・安全について意見交流を行い、児童が下校する様子や危険箇所等の現地確認を数回行った。その状況を基にして「子ども見守り・声かけ活動」冊子の作成と安心安全ボランティアの募集を含めた見守り活動の体制づくりを検討、実施した。

## ④ 堆肥作り

長年の勤労生産学習の一環として、地域の方の畑をお借りして進めてきた「農園活動」について話し合いを行ったところ、老人会の方より野菜の栽培だけでなく、その基となる土づくりの重要性が提案され、「二上農園」に堆肥を作る場所を設置するとともに、その意義を子どもたちにも講話いただいた。現在、堆肥づくりを実施している。

## ⑤ 読書活動

図書ボランティアを中心とした読み聞かせや読書環境の整備の検討、読書を活性化していくための取組（読書貯金、手作りしおりのプレゼント等）を企画、実施した。

## ⑥ 挨拶運動

「挨拶がこだまする学校・家庭・地域づくり」を目指し、登下校時の地域の方や保護者のかかわり方について協議した。また、意識向上のために、児童から挨拶に関する川柳を募集し、その活用（掲示板、ポスター、たすき表示等の作成）について検討、実施した。

このように学校と家庭・地域がともに当事者意識をもって知恵を出し合い、三者が互いに働きかけて、子どもの課題や目指す子ども像を学校を含めた地域で共通認識し、子どもたちの豊かな育ちを確保していけるよう、更に実践を積み重ねたい。

### 「子ども見守り・声かけ活動」 ポイント&対応マニュアル

- 連絡体制と対応マニュアル
- 通学路における見守り・声かけ活動
- 「子ども110番の家」対応マニュアル
- 地域別安全マップ（写真）
- 110番通報内容チェック表及び連絡先

保存版



平成25年度（H25.4.8版）  
二上コミュニティ生活安全部  
二上幼稚園・小学校教育友会編

氏名

## 2 成果及び課題

### (1) 成果

- ① 教職員と保護者や地域の方とのコミュニケーションが広がり、また、地域の方も子どもたちへの意識が高まり、積極的に学校に足を運んでもらえる機会が増えた。
- ② 保護者や地域の方とともに熟議することで、教職員自ら地域を知り、地域に働きかけ、地域を生かした教育推進への意識が高まった。

### (2) 課題

学校だより、学校HP、懇談会等で学校や子どもの課題や、教育方針等を積極的に提供することに努めたが、更にこの取組の意義や目的を伝え広げていく努力が必要である。

## 3 その他参考となる事項

情報提供のためのホームページアドレス [http://www.city.kashiba.lg.jp/nijou\\_s](http://www.city.kashiba.lg.jp/nijou_s)

## 1 実践内容

### (1) はじめに

本校は金剛山の麓にある学校で広い校区を含むが、大半の子どもたちが北宇智保育所から入学してくる。ここ数年、入学後の保育所等との段差に戸惑う子がいたり、保育所からの人間関係をひきずったトラブルが起こったりするたびに、保育所との連携が必要なのではないかと感じてきた。



### (2) 保育所との連携の実際

「子どもも大人も楽しみたい」「保育所と小学校、互いを大好きになりたい」、そんな気持ちで取組に臨んだ。そこで、これまでも取り組んできたカリキュラムの範囲内で共有できることを模索した。さらには、保育所の子どもたちが適度な段差で入学できるように、また、小学校の子どもたちはちょっと「大きい子」「小学生」としての自覚とプライドから自尊感情を高められるようにという願いを大切にしながら取組を進めた。

5月 がっこうのまわりたんけん（1年生→保育所）

6月 保育所のお散歩（年長組→小学校）  
小学校授業参観（保育士→小学校）

7月 夏祭りにご招待（年長組→小学校）  
おかえり1年生（1年生→保育所）

8月 保育所参観、  
保・小職員合同研修（保育所）

9月 小学校運動会（年長組→小学校）

10月 保育所運動会（小学校→保育所）  
柿狩り（年長組→小学校）

11月 世界の遊び大会（年長組→小学校）

2月 読み聞かせと豆まき（運営委員→保育所）

折り紙ブロックを使って（年長組→小学校）



1年生が保育所の子どもたちを迎える場面では、「どうやったら保育所の子が分かってくれるかな?」「保育所の子に楽しんでもらうにはどうしたらいいのかな?」と相手意識をもった活動を展開することができた。1年生は自分たちで楽しむよりも「楽しませる」ことを意識し、高いモチベーションと丁寧さで取り組むことができた。

また、職員同士が交流することで、小学校の教員だけでは気付けない様々な示唆を得ることができた。保育所でできることが、小学校では「できない」として扱われてしまっていたり、小学校の活動を見越した保育所での取組が行われていなかったりと、連携することで大きな成果をあげられるであろう視点がみつかった。

### (3) スタートカリキュラム

もう一つの大きな取組として、入学後の段差を低くし、よりスムーズに移行できるように、保育所の先生方と相談しながらカリキュラムを作成した。現行の教科書の内容を、連携とコミュニケーションのプログラムで組み立て直し、スタートカリキュラムを作成した。また、最初の1か月の授業の展開を週案としてまとめた。

児童数の減少に伴い、五條市内の小学校ではほとんどが単学級となっている。そうになると、その学校で1年生を担当したことがある先生が誰もいなかったり、経験のないまま一人で1年生を担当することになったりというケースが増えている。そうした時に、保育所での子どもの様子を知っていることや、どんなところに配慮したら子どもたちがスムーズに小学校生活のスタートを切れるかということをおおまかじめ分かっていたら、入学時の段差を大きなストレスなく、成長の糧にできるに違いない。その手がかかりとなるように取り組んでいる。

## 2 成果と課題

昨年度、保・小連携を進めて、二つの成果があった。

一つ目は、保・小の連携が軌道に乗ったことである。無理をしない範囲で計画的に実施し、その中で、「保育所と小学校を互いに大好きになりたい」というコンセプトを達成することができた。また、教師と保育士にも太いパイプができた。

二つ目は、保育所の先生と相談しながら、独自のスタートカリキュラム、アプローチカリキュラムを完成することができた。これによって、入学後の段差を低くし、よりスムーズに移行できる手がかかりができた。

教育の現場はチームの力が求められる。今後の課題として、多くの視点から子どもたちを観察できるようなネットワークづくりを進めていかなければならない。校内ではもちろんだが、保・小の連携に取り組んで、保育所と小学校の職員が交流することで新たな視点やより大きなバックアップの体制ができることが分かった。今後も、職員の太いパイプを、子どもを取り巻く教育環境に大きなプラスにしていきたい。



## 1 実践内容

### (1) 音楽専科としての取組について

音楽への興味・関心を深めるため、曲に合わせて足を踏み鳴らし、拍子に合わせて体を動かす「ストンプ」などでリズム感を育成することに取り組んできた。さらに、言葉が不自由な人とも「伝え合う」ことができる手話を取り入れた「あいさつの歌」など、積極的に体を使った活動に取り組むことで、リズム感や拍を意識できるようになってきた。その成果の一部を、本校を会場として行われた平成24年度奈良県小学校音楽教育研究会前期研究大会で、第3学年の公開授業として発表することができた。また、4年生以上の希望者を募り、約20名あまりの児童が金管バンド（メロディーキッズ）の練習に週3回取り組んでいる。保育所や地域の行事に積極的に参加し、一生懸命演奏している姿を見たり聴いたりしてもらうことで、多くの人に感動を与え拍手や笑顔をもたらしている。これが児童の自信と更なる意欲につながっている。



### (2) 教務主任・研究主任としての取組

#### ① 研究主任として

本校では「未来につなげよう！宇智っ子の夢、心豊かで自ら学ぶ児童の育成」を学校教育目標に教育活動を行っている。昨年度の総括から、「思ったことを発表し失敗しても大丈夫という場をつくること」などの課題が出された。そこで、「伝え合う力」を高めるため、副題として「国語科を核としてコミュニケーション能力を育てる」を設定し、研究主任として校内研修の計画と推進に努めている。全学年が国語科の公開授業に取り組むことができ、大学教授の指導の下、教員の指導力が高まり、児童のコミュニケーション能力が高まりつつある。

#### ② 特別支援学級を含む時間割の編成について

特別支援学級の児童や低学力、気になる子の支援に配慮し、教育目標に沿うように時間割を作成した。本校では、きめ細かな指導で一人一人が基礎・基本の確実な定着を図ることができるように、TT学習指導及び少人数指導を実施している。学級の様子や児童の実態について適宜打ち合わせの機会をもつことは当然であるが、児童の様子に合わせて臨機応変に対応できる指導体制もとっている。

#### ③ 職員の研修体制について

教員の世代格差が広がっている現状に対応して、経験が浅い教員とベテラン教員をつなぐ研修のために講師を招聘し、研修を実施した。児童の行動観察や指導のポイント、Q Uを生かした学級づくりなど、人権教育推進教員と協力しながら研修を計画し、取り組んだ。また、特別支援教育においては、通常学級における気になる子について、講師を招聘し個に応じたかかわり方について研修を深めた。

## 2 研修から実践へ

### (1) 学校の現状把握

学校力・教師力・人間力の3つの面から現在の本校の姿を捉え、分析する姿勢に立ち、主体的に取り組む。

### (2) 改革への方向性

#### ① 学校力の向上

- ・組織としての学校力を高めるために、校務分掌間を整理し、一人一人の職員がやりがいをもって活用できるように努める。
- ・教員の世代格差が広がっている現状に対応して、経験が浅い教員とベテラン教員をつなぐために講師を招聘し、研修を実施する。
- ・教員の特質を生かした校務分掌。次年度に向けた継続的な取組と新しい取組について企画立案する。

#### ② 教師力の向上

- ・大学教授の指導の下、全学年が国語科の公開授業に取り組むことで教員の指導力を高める。
- ・授業のユニバーサルデザイン化に取り組むことで個に応じた授業を目指す。
- ・各教科の言語活動を活用して学んだことを、道徳・特別活動・総合的な学習の時間などで生かす場づくりをする。

#### ③ 人間力の向上

- ・児童の行動・学習の成果や課題に対する動機付けをすることで、自尊心を高め、主体性を高める。
- ・児童についての共通理解を深めたり、授業の技を交流したりするために、沙龙的な集まりを継続する。

## 3 成果及び課題

本校は、全児童数200名に満たない小規模な単学級の小学校である。1年から6年までのすべての音楽科の授業を担当するとともに、教務主任を担当することで児童への指導力と組織での調整力の2つの力を伸ばすことができた。今後の課題について、次のように捉えている。

- ・学校の教育目標を達成するための取組について、管理職・担当部署と協議を重ねる。
- ・ミドルリーダーとなっている教員と協力しながら組織運営を図る。
- ・地域の教育力を学校教育力に生かすために、スクールボランティアの積極的な活用を企画し、実施する。
- ・PTA役員・学級委員と連携し、担任がスムーズな学級経営をしやすいようにサポートする。
- ・教師力の向上を目指した校内研修を企画し、実施する。

今後ともこの経験を学校運営の場に生かしていきたい。

## 4 その他参考となる事項

宇智小学校ホームページ <http://www.gojo-nar.ed.jp/uchisho/>

## 1 実践内容

本校は昨年、コミュニティスクールとしての指定を受け、地域とともにある学校づくりを推進している。校内においては、生徒の問題行動はほとんどみられず、一見、落ち着いた学校生活を送っているが、心ない言葉で簡単に人を傷つけたり、人を揶揄したりする生徒が一部にみられるため、自分の能力を最大限に発揮できずに学校生活を送っている様子がうかがえる。



このことから、生徒の規範意識向上のため、生徒主体の取組を重視した取組が効果的であると考え、生活目標を数値化し、その目標を達成するための方策を教師と生徒会で話し合い、生徒主体で取組を進めた。また、地域とともに生徒が意欲的に取り組む社会貢献活動の環境を整えた。

### (1) 生徒と教師の取組

#### ① 生活目標の数値設定

学校生活における具体的目標の数値設定を行い、生徒と教職員が一体となって目標達成に取り組む。

【9項目の生活目標を設定しているが、具体的に5項目を示す。】

内 容	取 組	数値目標
ア からかい いじめ 暴力行為	・人権強調月間の設定（10月） ・全学級「自分も仲間も大切にす宣言」発表	生徒・保護者90%
イ 社会貢献活動	・生徒会主催の地域貢献活動の定例化（月1回） ・部活単位での地域貢献活動	生徒60% 保護者80%
ウ 服装指導	・服装についての授業 ・生徒会と服装について考える	生徒・保護者80%
エ 清掃指導	・掃除についての授業	生徒80% 保護者90%
オ 言葉遣い	・生徒会の取組 「言葉遣いについて考える週間」	生徒・保護者80%

数値目標の数値は、保護者・生徒のアンケート結果から設定したものである。

ア 『三笠中はいじめや暴力を許さない学校である。』

イ 『三笠中の生徒はボランティア活動によく参加している。』

ウ 『三笠中の生徒は中学生らしい服装をしている。』

エ 『三笠中の生徒は清掃に熱心に取り組んでいる。』

オ 『三笠中の生徒は挨拶・言葉遣いについてよくできている。』

という質問をアンケートで行った。

## ② 「いきいき三笠を考える会」の定例化

全校生徒が、心から楽しいといえる学校になるためにはどうすればいいのかを、生徒会本部役員と教師が、本音で話し合う場を定例化し、学校や生徒の現状、分析、取組等を協議し、全校体制で実践する。



## ③ 生徒会の取組の充実

朝の挨拶運動、チャイム前着席運動、リーダー研修会、地域貢献活動など

### (2) 生徒会活動の充実

- ・地域の清掃活動への参加・地域行事への参画
- ・各種施設や事業等との交流



## 2 成果及び課題

生徒会本部役員や学級代表など、リーダーたちの意識や実践力の高まりは顕著であり、愛校心の高まりがみられる。しかし、一方で学校全体としての自立心や意欲の高まりはまだ不十分で、社会貢献活動も拡がりはみられるものの、意識や行動の顕著な変容がみられない。ボランティア活動は、参加した数ではなく、地域の人と出会い、話し、感じ、学ぶことを活動の軸として、生徒たちが変容し、よりよい生き方をみつける活動へと深化させた。

## 3 その他参考となる事項

奈良市立三笠中学校ホームページ

<http://www.naracity.ed.jp/jhs01/index.cfm/7,html>

## 1 実践内容

中学校における進路指導は、従来の上級学校への出口指導からキャリア教育へと変容してきたことから、進路指導主事の仕事も大きく変わってきている。従来の「情報、データを分析し、入試に向けての事務手続きをする」という役割に加えて、「キャリア教育」という1～3年生を見通した広い意味での「進路指導」の運営が必要になってきている。しかし、高校入学後、中途退学や単位制高校へ転学をしてしまう卒業生が多いのが現実である。



そこで、「主体的な進路選択」をする生徒を育て、将来を見据えた進路選択ができれば、高校入学数か月で自らの進路選択を否定し、中退してしまうことにはならないのではないだろうかと考え、職業や進路に関する体験や調査を通じて職業観を育成するために、「キャリア教育推進委員会」を発足させた。教務と各学年の総合担当で組織し、学級活動・道徳・総合的な学習の時間の年間計画を一つにまとめて、3年間を見通したキャリア教育が行えるよう計画した。

### (1) 1、2年生での取組

1、2年生では、2年生の「職場体験」を中心に据え、それに向けた取組を進めている。1年生では、夏休みに家族の職業聞き取り調査や、学級活動や道徳の時間を使っての職業調べやビデオ鑑賞を行い、「職業講演会」につなげた。「職業講演会」では、『美容業』『旅行会社』『マスコミ関係』『医療・介護』などの事業所から講師を招いている。

2年生では、国語科と連携して、礼儀や敬語、手紙の書き方の学習をしたり、『マナーアカデミー』から講師を招いて「マナー講習会」を行ったりして「職場体験」につなげた。

「職場体験」につながる様々な取組を通して、体験活動だけではなく、事前事後の取組からも、社会の中で果たす役割や自分の生き方についての考えが深まっていったと思われる。

### (2) 3年生での取組

#### ① 過去の取組

3年生では、1、2年生の取組を踏まえ、自らの進路を考える機会を多くもたせたいと考え、いくつもの取組を実施した。体験入学に参加した内容や感想を記したレポートを壁新聞やレポート集にまとめ、他の生徒の進路に向けての資料となるように活用した。しかし、体験入学は1学期に申し込む者が多いので、進路に向けての意識がまだ育っていない生徒は、どこも見学しないまま入試時期を迎えることになってしまった。

また、県内外の高等学校に依頼し、7月中旬に高校見学を行ったこともある。班ごとに高校を訪問し、校舎やクラブの見学、事前に考えた質問に答えてもらうなどし、文化祭で発表した。しかし、各高校との調整が難しいこと、生徒が希望する高等学校が必ずしも選択肢にあるわけではないことが難点だった。

#### ② 平成23年度からの「出前授業」

①の経験を踏まえ、平成23年度から県内国・公立高校の先生にゲストティーチャーとして出張授業をしていただく取組（本校では「出前授業」という）を始めた。

目的は、「高等学校の特色ある授業を体験することにより、自分の目標を明確にし、卒業までの時期を目的意識をもって学習に取り組む契機とする。」ということである。

平成23、24年度は、2学期に一条高校、奈良高専、奈良北高校、法隆寺国際高校などの先生の授業を、受けることができるようにした。事前に「中学校ではできない高校独自の授業を」と依頼していたこともあり、生徒たちにとってとても新鮮で魅力ある授業ばかりであった。

《一例》

- ・一条高校 外国語科 「食べ物を題材とした英会話」
  - ・奈良高専 機械工学科 「粉末から金属を作る」
  - ・奈良北高校 理科 「液体窒素を使った実験」
- 《生徒の感想》

・今日、初めて金属製品を作った。今まで、「金属製品は工場でしか作れないものだ」と思っていたので、日ごろ使っている理科室で金属ができることに非常に驚いた。高専へ行ってもっといろんなことを知りたいなと思った。

今年度は、高校進学への意識を高め、積極的に体験入学やオープンキャンパスに参加する生徒を育て、夏休み以降の学習や進路選択に役立てたいというねらいで、1学期（7月中旬）に実施した。

今年度実施したのは以下の高校及び内容である。



	学校名	教科	内 容
1	奈良高専	理科	「音をみよう！」
2	奈良北	理科	「物質の状態変化」
3	奈良北	英語	「ALT先生とともに高校1年の英語の授業を体験しよう」
4	生駒	数学	模擬授業
5	添上	体育	「ダンス」
6	奈良朱雀	商業	「簿記入門」 基礎的な簿記を体験する
7	法隆寺国際	歴史	「地域から世界を学ぶー法隆寺の謎を問うー」
8	高円	美術	①美術について ②学校紹介
9	榛生昇陽	福祉	①福祉科で学ぶこと ②生活支援技術の授業
10	王寺工業	技術	「LEDを使ったキーホルダーの制作」

## 2 成果及び課題

3年間実施した「出前授業」であるが、生徒は、中学校とは違う実験や授業の展開に目を輝かせていた。特に、実業科などの普通科以外の授業は、とても専門的で、漠然と考えていた進路を具体的に考えるきっかけになったように思う。今年度は7月に実施したが、生徒の進路選択への意識を高める観点、年間スケジュールからも最適であった。

しかし、準備を含め高等学校の先生方に負担をおかけしてしまう点、理科室やPC室など設備をもつ教室に限られている点など課題も多い。

## 3 その他参考となる事項

緑ヶ丘中学校ホームページ <http://www.ed.city.ikoma.nara.jp/school/midori-j/>

## 1 実践内容

### (1) はじめに

前任校で12年間、本校で1年間、体育主任として体力向上の推進に取り組んでいる。今日、体を動かす機会が減少し、生徒の体力低下が問題となっている。また、運動に興味をもたない子どもも増えている。そのような中で、生徒の体力向上を図るためには、学校での週3時間の体育学習の在り方がますます重要になっている。



### (2) 生徒の実態について

本校は、3年前より「魅力ある体育活動づくり計画」に基づき、体力向上の取組を着実に進めてきた。昨年はA判定者が19名であったが、今年は41名に増えたことは大きな成果であると考えている。しかし、テストの項目別に詳しく見ると、どの学年においても上体おこし、反復横跳びは県平均を上回っているが、立ち幅跳びにおいては全学年とも県平均を下回っていることが分かった。

### (3) 体力向上の取組について

前任校では、体育の授業の初めに1kmのランニングと5分間のサーキットトレーニングを行っていた。生徒に体力向上のために行うことを最初に説明したが、生徒が意欲的に取り組むようになるまでには3年かかった。本校では25年も前から同じ取組を行い、体力向上に努めてきた。

本年度は、県教委の体力向上プロジェクトモデル校となり、2年生男子において、5月から持久走と立ち幅跳びの2種目に絞って、プロジェクトを開始した。

具体的には、これまでからも毎時間取り組んでいる600mのランニングとサーキットトレーニングのタイムをノートに記入させ、生徒にタイムの短縮を目標にして取り組むよう指導した。また、立ち幅跳びの記録を伸ばすために、サーキットトレーニングの内容を工夫し、「5段跳び」等の種目を入れた。

## 体育館でのサーキットトレーニング

- 1 ランニング (5周)
  - 2 腕立て伏しが腕屈伸 (15回)
  - 3 仰が上体おこし (20回)
  - 4 伏が全身そらし (20回)
  - 5 パービー・ジャンプ (10回)
  - 6 支持倒立 (壁タッチ) (5回)
  - 7 スクワット・スラスト (20回)
- ※ 7番の種目を「5段跳び」に変更



## グラウンドでのサーキットトレーニング

- 1 ランニング3周 (600m)
- 2 仰が上体おこし (20回)
- 3 伏が全身そらし (20回)
- 4 バウンディング (20m)
- 5 逆上がり (鉄棒使用) (5回)
- 6 もも上げジャンプ (10回)
- 7 手押し車 (25m)
- 8 スプリンター (20回)
- 9 50mダッシュ

※ 8番の種目を「5段跳び」に変更



## 2 成果及び課題

体力向上の課題は、生徒がいかに意欲的に活動に取り組むかということであり、これは、前任校でも同様であった。

そこで、授業に一番早く来た生徒や、ランニングやサーキットトレーニングに積極的に取り組んでいる生徒を賞賛したり、全体の場で認めたりすることにより、生徒の意欲（モチベーション）を高めることに努めた。すると、真剣に取り組む生徒がだんだんと増え、今では、ほとんどの生徒が意欲的に取り組んでいる。また、2年生男子においては、立ち幅跳びを5月、6月、7月と1か月毎に計3回測定し、持久走も2回測定した。その結果、両種目とも、記録が向上した。

中学校体力向上支援事業 体力データのまとめ (2年男子)			
持久走 (1500m)	5月9日	390.4秒	・平均で20秒近く速くなっている。
	6月25日	371.4秒	
立ち幅跳び	5月9日	183.2cm	・平均で5月から6月は7.7cm、6月から7月は2.9cm程度のびている。
	6月25日	190.9cm	
	7月10日	193.8cm	

今後は、生徒自身が運動の内容を選択したり、自己目標を設定して取り組んだりするなど、生徒自身の内発的な動機付けにより意欲を向上させるような取組に発展させることを目指したい。そのためにも、今年1年間の成果を検証するとともに、今後も継続した取組として発展させていきたい。

1 実践内容

体操競技といえば、オリンピックでも活躍している華やかなスポーツではあるが、中学校の部活動ではマイナーなスポーツの一つである。入部してくる生徒のほとんどは経験のない初心者であり、高校進学後も県内では体操部が少なく、やむを得ず他の部活動を選択する生徒も多い。そこで、他の競技でも生かせるように、運動に取り組む姿勢やトレーニング方法などを考察し、自分で考えながら活動できるような生徒の育成を目指すこととした。



(1) 練習計画の作成

できるだけ綿密な練習計画を作成し、体操部の目標や練習の目的を明確にすることで、技の習得や習熟スケジュールを考えながら練習できるようにした。

① 年間計画について

1年間を総体期・新人大会期・トレーニング期の3つに分け、それぞれの時期に目指すべき課題をあげ、個人の目標を考えさせた。総体期は4～8月で、演技の習熟を目指す期間、新人大会期は8月下旬～11月で、新人大会に向けての練習期間、そして、トレーニング期は11月～3月で、基礎体力の充実と技の習得をする期間とした。新入生については、4月から新人大会へ向けて、基礎技術の習得を目標に取り組みさせた。

② 月別計画について

練習日、約2週に一度の休養日、練習強度・練習時間を入れた計画を作成、それを提示し、欄外にはその月の目標（生活面・部活動面）を入れ、月末に配布した。練習強度は次の4段階で行った。

- D練習＝休日の練習（4時間程度）
- C練習＝平日の練習（2～3時間）
- B練習＝平日の練習（1時間程度）
- A練習＝休養日

平日の練習については、3つの競技種目のうち、1日1、2種目を組み合わせ、40～50分単位でローテーションをしながら練習できるようにした。休日は、半日練習を基本に全種目を練習できるように計画した。1種目の練習内容は、できるだけ試合に近い形でできるように、30秒アップの後、演技を最初から最後まで続ける続行練習を1、2回行い、残りの時間を個々の技の修正練習を基本とした。また、練習が単調にならないように、倒立静止競争、着ピタ（着地で動かない）など、ゲーム感覚の競い合いも時折入れながら行った。

**6月練習計画**

八木中学校体操部

日	日	時	行事	練習内容	時期
1	月	3:30			C
2	火	4:00			C
3	水	3:30			C
4	木	4:00	資料撮影(1年・2年1～4)		C
5	金	3:30			C
6	土	1:00			D
7	日	8:30			D
8	月	3:30			C
9	火	4:00	朝礼		C
10	水	3:30	3年予力テスト		C
11	木	4:00			C
12	金	3:30			C
13	土	8:30	部中休		
14	日				
15	月	3:30	短冊5限		C
16	火	4:00			C
17	水	3:30			C
18	木	4:00	資料撮影(3年・2年5～8)		C
19	金	3:30	1年準備指導		C
20	土	8:30			D
21	日				
22	月		1年合宿訓練		
23	火	3:30	1年代休 期末1週間前		
24	水				
25	木				
26	金				
27	土				
28	日				
29	月				
30	火				
1	水		期末検査		
2	木				
3	金		標準検査(1・3年)		
4	土				

【目標】基礎技ができるようになる。

- 基礎体力をつけよう。(柔軟・脚力・筋力を身につけよう)
- 美しい演技を心がけよう。
- 練習時間に遅れない。

注意

- 練習日、練習時間が変更することもあります。
- 欠席連絡を必ずすること。

【トレーニング計画】

- 1run3周 前庭200
- 2ダッシュ3 もも上げ3 片足跳び2 (30m)
- 3ハンドバウンド10×3 ジャンプ10×3 抱え込みジャンプ5×3
- 4腹筋・背筋・腕立て10×3
- 5遊脚立 15秒
- 6柔軟 前後(開脚・閉脚) 左右開脚 前後開脚 肩 フリッジ

B練習の日は、

- 1～5は同じ
- 4腹筋・背筋・腕立て10×5
- 5遊脚立 300秒
- 6柔軟

7月5日 種別体育館 10:00集合 弁当・水筒

## (2) 演技構成表と習熟度表の作成

個人の演技づくりへの意識付けと演技のできあがり状況を理解し、客観的に自分の演技を確認できるようにした。

### ① 演技構成表について

要求される技を入れながら自分の演技を考えさせた。技の減点も考慮して目標とする得点を挙げさせた。

### ② 習熟度表について

生徒とともに技の習熟度を確認し合い、それまでの練習を振り返り、達成できていない原因を考えさせた。また、次の段階のめあてを決めた。

## (3) トレーニングについて

体操競技で特に必要な瞬発力や柔軟性を高める運動を練習前の30分間、準備運動に取り入れた。また、個人的に体力面の弱いところを練習後の補強運動で補った。

## (4) ミーティングについて

定期的にミーティングを行い、練習計画・習熟度・トレーニングの意義や目的について、粘り強く話し合い、自ら気付かせるようにした。

## (5) 保護者会について

保護者の協力がなければ部活動は成り立たない。年間数回の保護者会を開き、部活動指導者の意図と保護者の意見のすり合わせをし、お互いの理解を深めながら子どもの課題を解決するための方向性を確認し合った。

ゆか										
種目	E	D	C	B	A	難度	特別	加減	実施	
										6
1	ロングド～後転跳び～後方伸身宙返り1回ひねり					B	II		0.2	
2	前転跳び～前方伸身宙返り					B	I		0.1	
3	前後開脚座					A	V		0.1	
4	正面支持臥～伸腕屈身力倒立					B	IV		0.2	
5	前方宙返り連続					B+B			0.1	
6	正面片足平均立ち					A	III		0	
7	ロングド～後転跳び～後方伸身宙返り					B			0.1	
8										
9										
10										
11										
12										
特別要求									設定得点	
I	前方系の跳躍技						A		8.7	
II	後方系の跳躍技						A			
III	片脚上でのバランス技(2秒静止)						A			
IV	倒立静止(2秒静止)						A			
V	柔軟性を表現する技						A			

## 2 成果及び課題

学年が上がるにつれて生徒の意識も向上し、活動にも自主的・積極的に練習参加するようになった。また、上級生が自身の過去と下級生の状態を重ね合わせ、親身に指導をする場面もみられるようになった。戦績としては、平成4年から平成21年までの18年間連続近畿大会出場、県総体男子団体優勝10回、女子団体優勝4回とそれなりの実績をあげることができた。また、卒業後も体操競技を学び、高校、大学の体操指導者、民間のジュニア指導者への道を歩んでいる生徒たちもいる。

社会人になってからも学年を越えて集まり、楽しみながら練習会をする卒業生の姿から、試合は一人で演技台に立たなければならないが、練習は仲間がいるからこそできるのであり、つながりを大切にすることの重要性も伝えることができたのではないかと考える。

現任校へ赴任するまでに若い指導者へ指導方法を継ぐことができなかったという反省はあるが、現在まで蓄積した経験を、体操競技以外の部活動においても活用できるような方策を考えていきたい。

## 分野番号 6 中学校 学校教育目標の具体化の部

### 生徒の判断力を向上させ、自ら行動できる防災教育 ～ 生き抜いて、助けられる人から助ける人へ ～

五條市立五條中学校 教諭 尾崎 和弘

#### 1 はじめに

平成23年3月11日、東北地方を中心に襲った東日本大震災や、同年9月の私たち五條市における、豪雨による未曾有の水害により、多くの命が犠牲となった。自然災害の恐ろしさを改めて実感させられるとともに、防災教育の重要性を強く再認識させられた。



本校では、大地震発生の際に適切な行動のとれる生徒の育成を目指し、日ごろの危機管理意識を高め、自らの命を守る判断力と行動力を向上させる取組を行った。また、災害時には本校が避難所に指定されており、過去の被災地の教訓を基に、教職員が避難所において果たせる役割を想定し、地域・家庭との連携を図った避難所運営について研修を深めた。

#### 2 実践内容

##### (1) 保護者との連携と職員研修

###### ① 保護者への理解と協力を求めて

災害発生時の生徒引き渡しについての体制を見直し、「生徒引き渡しカード」の作成を行い、保護者の協力・理解の下にカードの共有を図った。また、各家庭に長期休業期間を利用して、「家族防災会議」を三者面談等で進め、その際の資料提供を行った。

###### ② 避難訓練の在り方

より切実感をもって訓練に取り組むために、1：数値目標を掲げる 2：予告なく突発的な事象への対応ができる 3：「お・か・し・も」（押さない・かけない・しゃべらない・もどらない）を合い言葉にして、災害時に控えるべき行動の具体的な事例を資料提示する、の3点を点検・実施した。

###### ③ 職員研修における災害図上訓練の実施

和歌山大学防災研究教育センター客員教授の今西武先生を講師に招き、教職員を対象に災害図上訓練（避難所編）を実施した。教職員が避難所で果たせる役割をシミュレーションを交えて討議し合った。



写真：災害図上訓練の様子

##### (2) 特別活動における取組

###### ① 調べ学習（地震体験聞き取り調査と危険箇所現地調査）

夏休みを利用して、生徒の目から見た登下校時の通学路における危険箇所の調査と、過去の大地震の様子や先人の災害経験を聞き取り調査する課題を出した。

###### ② 体育大会における学年種目

2学年教師集団と各学級代表が話し合い、「レスキュー80」と称したリレー種目を考案した。竹竿2本とレジャーシート1枚で、簡易担架を容易につくることができた。

③ 分団会ごとによる地震の際の危険箇所報告会

調べ学習で収集した危険箇所情報を分団会ごとに集約・吟味させ、パワーポイントで地図・写真等の資料を提示し、注意点や改善点を提案させた。生徒間の危機意識の共有を図り、より安全な登下校の実現を目指した。

(3) 防災教育宿泊訓練の実施

① 避難所の開設

すべてのライフラインが寸断されたことを想定して、地域の方々や保護者とともに本校校舎を利用した1泊2日の避難所生活を体験した。

② 段ボールパーティション(間仕切り)体験

実際に教室を避難所に見立て、一辺120cm近くある段ボールとクリップを利用して、間仕切りをした。1教室を4分割し、1班(4~5名)の部屋を4つ作る作業をした。

③ 給水支援

五條市水道局より、給水ポンプ車による給水支援をいただいた。簡易タンクに飲料水が給水され、4つの蛇口に連結することで、スムーズな給水が得られた。

④ 野外炊飯

食事については、湯を沸かすだけでできる物を必要最小限にすることを心がけた。

⑤ ダーク&ライト体験活動

光のない不便さを体感するだけでなく、真っ暗闇の状態で行動する際、どんな小さな光でも存在すれば、不安を和らげ安全かつ迅速な行動がとれることを実感した。

⑥ AED研修

「助けられる人から助ける人へ」を直接実行する活動として、生徒たちは真剣に取り組んだ。人命救助を行う上で、恥ずかしさや照れは妨げとなり、命の危機に直面した際、「とにかく勇気をもって、精一杯取り組むこと」の大切さを救命救急士から教えられた。



写真：宿泊訓練中のAED研修の様子

3 成果と課題

生徒の危機管理意識を向上させるには、継続した防災教育が必要である。また、教職員にとって切実な課題は、学校が避難所になった場合のノウハウをほとんどの教職員が知らなかったことである。その中で災害図上訓練の実施は、実践的なシミュレーションに基づき、私たち教職員が災害時に果たせる力量を高めるものとなった。

また、課題の1つ目は、災害に対する危機意識は大地震だけに限定せず、自然災害から身を守るためには、危機管理と関連する防災気象情報を的確に読み取って、自分で危険を予測し、判断できる大人へと成長させなければならないということである。2つ目は、防災教育を本当に意味あるものにするために、自治体との協力体制を密接に図ることである。3つ目は、「学校は地域と一緒に学んで学ぶこと」が重要であり、災害時に役立つ実践的な防災教育を行うためには、地域との連携が欠かせないということであり、そのためにも地域のことをよく知り、地域との関係を日ごろから保っておくことが重要となる。今後、学校が地域とのパートナーシップを図る上で、大いに防災教育を活用していきたい。

## 1 実践内容

### (1) 教育課程の取組

平成16年度より指定を受けたスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）事業の担当者として、近隣の京都大学、大阪大学、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学などと生徒を対象とした高度な課題研究や講演、あるいは教員研修を軸とした高大連携講座を推進した。

平成24年度より、第3期のSSH事業の推進に伴い、1年生のスーパーサイエンスプロジェクト（以下、SSP）科目「地域・生活の科学」では奈良に関する探究活動を中心とした学習を行い、生徒によるポスター発表の場を設け、「奈良TIME」への更なる内容の発展を推進している。「情報」と「総合的な学習の時間」を統合した「SSP基礎」を3単位、1学年時に必履修として実施し、基礎的な科学の学習を通して科学への興味・関心を高め、自分の考えや研究内容を文章にまとめ発表する力や情報機器の活用能力を育てている。このうち1単位を「地域・生活の科学」として、平成24年度から奈良に因んだ内容を探究し学習する「奈良TIME」に充当している。具体的には「奈良の大仏を科学する」「大和野菜についての研究」「奈良を英語で紹介する」「大和の民話の調査」等、1年生が20以上のグループに分かれて1年間研究を行い、校内の発表会でポスター発表を行っている。さらに、2、3学年では、生徒は学校設定教科「SSP発展A・B」の2単位の各科目（「SSP奈良A・B」「SSP数学A・B」「SSP理科」「SSP物理」「SSP化学」「SSP生物」「SSP地学」「SSP科学英語A・B」「SSP表現A・B」）を自主的に選択し、探究活動や研究活動を行っている。



### (2) 課外活動の取組

課外活動の場として、平成19年度より第2期の事業の推進に伴い、ロボット研究会や数学研究会を創設した。

ロボット研究会ではWRO、SRC、ロボカップの世界大会を目標に部員とともに取り組み、平成21年度より全国大会に出場、さらには、平成23年度ロボカップ世界大会（イスタンブール大会）では第4位に入賞することができた。また、物理部では物理チャレンジ、パソコン甲子園、缶サット甲子園にも挑戦しており、全国大会への進出の実績を生かして、その活動をより推進している。



ロボカップ世界大会

### (3) 地域との連携活動

校外では、平成11年度の「青少年のための科学の祭典」奈良大会の設立当初から、実行委員として活動を続けている。また、奈良県高等学校理化学会常任委員、「きっ

づ光科学館」の実験工作開発メンバー、「けいはんな科学のまちのこどもたちプロジェクト」のワーキングメンバーとして出前実験教室等、科学に対する地域の児童や生徒への啓蒙活動をボランティアで行っている。さらに、平成21年度「第1回教員南極派遣プログラム」に参加させていただいた体験を県内の小・中・高校等で講演させていただいている。

なお、平成24年度に「地域の中核拠点形成」としてコアSSH事業を立ち上げ、地域の小・中・高校計15校を連携校として、サイエンスフェスティバルやロボット講習会を実施した。現在取り組んでいる第3期SSH事業では、前年度のコアSSH事業の連携を県内の小・中・高校の計22校に拡大し、大学や研究機関に協力を得ながら、ともに科学を学び合う「寧楽（なら）SSネット」を創設し、奈良県の理数科教育の普及活動に取り組んでいる。

## 2 成果及び課題

SSH事業の導入により、以上のような取組やCSSNプログラムでの米国のUCLAやNASA（JPL）、アジアサイエンスキャンプ、内閣総理大臣オーストラリア科学奨学生制度へ生徒を派遣し、海外へ目を向けた国際的な人材の育成に貢献できた。

生徒の課題研究に関しては、研究内容をより深化させ、一定の成果を上げつつ、研究の成果は校内や県内では積極的に発表している。しかし、全国的なレベルでの発表や各種オリンピックの予選への応募は増加しつつも、国際的なレベルに挑戦できるものはまだまだ少ない。このことは改善すべき課題である。さらには、本校教員のアンケート結果では、まだ学校全体で取り組めていないとの指摘もある。以上のような課題に対しては、更に全教職員の連携に力を入れて取り組むことを目標としつつ、県内の連携校とともに長期的な奈良県の理数系人材の育成も視野に入れて、科学コンテストやものづくりコンテスト、科学フォーラムを継続的に実施していくことを検討している。



サイエンスフェスティバルの様子

## 3 その他参考となる事項

奈良県立奈良高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/nara-hs/>

## 分野番号2 高等学校 生徒指導の部

### 大規模校としての学校、生徒の実態に即した生徒指導について

奈良県立平城高等学校 教諭 山口 浩

#### 1 実践内容

本校は、奈良市最北部の平城ニュータウンの中に昭和55年に開設され、学年10クラス、全校生徒1,196名と県内有数の大規模校である。また、生徒は県内全域から通学しており、出身中学校数は90を超える。大学等への進学率が99%であり、従来、生徒一人一人の学校への帰属意識や、責任感が希薄であった。このような平城高校生としての一体感に欠ける雰囲気の中、遅刻の常習化、茶髪や服装、言葉遣いの乱れなど規範意識の乏しい生徒が目立ち、地域の方からも通学マナーの悪さを指摘する声が多く寄せられていた。



生徒指導面においては、学年ごとに指導の内容や方法が異なり、学校としての意思統一が不十分であった。上記の課題を受けて4年前に生徒指導部長を拝命し、まず現状を変える取組として、各学年主任との毎月2回の話し合いの場をもった。平城高校の目指す学校像や生徒像を確認し、全教員の共通理解を図った。

毎日、登校指導を行い、一人でも多くの生徒の朝の表情を見るために生徒と笑顔であいさつを交わし、全校生徒とかかわることを目指した。日々9割以上の生徒とのかかわり、状況把握をし、1日をスタートしている。その中で、服装、頭髪などの指導を要する生徒に対しては、学年、クラス、名前を確認し、その生徒の個の自覚や責任感を高める指導を会話で行い、生徒の名前を覚えることでその生徒との以後の指導、かかわりに繋げている。9割以上の生徒の名前を覚え、コミュニケーションを重ねていく中で平城高校生としての自覚と責任感を促すとともに、各学年主任と毎日連携（報告・連絡）し、全教員が徹底した同じベクトルで日々の生徒指導を行っている。

目指す生徒像： 「自由な中に規律があり、品格を感じさせる学校」  
「主体的に学 び続ける生徒の育成」

##### (1) 服装（身だしなみ）指導

服装については、「平城高校生としての誇りをもって、品格のある制服の着こなし」をモットーに全校集会、各学年集会で意識を高めさせ、また、毎日の登校指導やホームルームで点検を行い、授業開始時には身だしなみを整えた上で学習活動に専念できるように指導している。「品格の向上」を基本として、全教員の徹底した指導により、その中から平城高校生としての制服を正しく着ることの大切さを自覚し、責任が芽生えることにより、生徒一人一人が本校の制服に誇りをもって品格のある着こなしができている。

##### (2) 登校指導と遅刻指導

通学路混雑の緩和や遅刻防止の観点から学年別時差登校を実施し、1年生は8時5分、2年生は8時15分、3年生は8時25分までに登校するように奨励している。

生徒たちもその意義をよく理解し、各学年97%の生徒が実践し、早く来た時間を予習・復習、読書の時間に当てるなど、ゆとりをもって学習活動に取り組んでいる。

また、通学路や校門前で担当教員7名が毎日登校指導に当たり、通学マナーや服装、頭髪指導をしているが、それは登校時の生徒の様子や友人関係などを知る上でも大切な取組となっている。その指導を通して生徒の名前を覚え、コミュニケーションを重ねていく中で、生徒の平城高校生としての自覚や責任感が高まるように努めている。

この取組を通して、4年前は1年間の遅刻総数が3,015回（そのうち寝坊の遅刻は1,329回）であったが、昨年度は1年間の遅刻総数が1,561回（そのうち寝坊の遅刻は511回）に半減した。

### (3) あいさつ、言葉遣いの指導

あいさつについては、毎日の登校指導や様々な機会を捉えて、教員から積極的に声をかけるようにし、その際に言葉遣いについても指導するように心がけている。一人一人と目を合わすことで、すべての生徒が元気で明るく気持ちよいあいさつができるようになった。

### (4) 生徒指導と部活動

現在、85%の生徒が部活動に所属し活動している。クラブ員集会を実施し、クラブ員が学校生活の様々な場面で積極的、先導的な役割を果たすように指導している。また、クラブ員としての自覚や学校生活の中での位置付け、「文武一貫」を念頭に置いた心構え等、あるべき姿に関して共通理解、意思統一させる指導もしている。

学校生活において、服装やあいさつ、言葉遣いなど礼儀正しく爽やかでけじめのある行動『平城スタイル』を確立してくれている。

学校生活等意識調査(全校生徒対象)集計結果より	H21年度 → H25年度	
・生徒との信頼関係に基づいた生徒指導が行われている	「思う」 52.4%	63.3%
・服装や頭髪等の指導が適切に行われている	「思う」 73.8%	86.1%
・マナーや言葉遣いに関する指導が適切に行われている	「思う」 72.5%	87.4%
・校則を守っている生徒が多い	「思う」 71.8%	86.8%

## 2 成果及び課題

生徒指導の理念を全教員に対して明確に示し、教員が個々の生徒の状況をよく把握し、温かく細やかにかかわっていくことで信頼関係がより強まっている。そこから全校生徒が自分たちでよき校風、伝統を築いていくという意識が浸透し、学校や組織の一員としての自覚をもち責任ある行動がとれるようになってきた。これまでの取組の成果が出てきており、「大きな声で爽やかにあいさつできる生徒」「服装や頭髪などを高校生らしく」「ルールやマナーの遵守」「遅刻の防止などの時間を守る生徒」「文武一貫の実践」などの『平城スタイル』を身に付け、品格を感じさせる生徒が数多く育っており、保護者や地域の方々からも高い評価を得ている。高校生を取り巻く社会環境が激変している現在、今後更に生徒が主体的に考え判断し行動できるよう、そして規範意識をもって有意義な高校生活を送り、将来社会を担っていくという自覚を身に付けた生徒を育てられるよう一層意欲的に取り組みたいと考えている。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立平城高等学校ホームページ <http://www.nps.ed.jp/hei-jo-hs>

## 1 実践内容

学習指導要領の改訂・「奈良T I M E」の導入をきっかけとして、学力の向上・主体的に学ぶ力の育成・進路の実現をテーマに新しい事業を展開したいと考えた。そのためには、目的意識の明確な学習意欲の向上が必要となるが、単に学力向上を目指すのではなく、社会人基礎力の要素である「行動する力・考える力・チームで働く力」を育てることにより、目的は達成されると信じ、以下の事業を企画・実践した。



### (1) 高大連携事業を取り入れた奈良T I M E「倭（やまと）」の企画・実践

奈良T I M E「倭」の企画を担当し、平成24年度から各学年1単位で先行実施した。1年次は、第1部とし、大学の一般教養をイメージして計画した。具体的には幅広く奈良を再認識するため、1学期に奈良を題材にした壁新聞を制作。2学期は、奈良の産業、環境、文化遺産の3分野の授業を行い、3学期には、県内の大学より留学生8人を招いて、お互いの文化・習慣について話し合う場を設けた。2年次は、第2部とし、大学の専門教養をイメージして、大学の学びを体感しながら、奈良の経済、観光、公共政策、社会学、環境、健康・教育の6分野から1つを生徒に選択させ、自ら設定したテーマに取り組む課題研究とした。内容は、提携する6大学の教員による年3回ずつの講義及びプレゼンテーションと、観光客や地域住民への街頭インタビュー、企業・県庁への聞き取り調査などのフィールドワーク等を含んでおり、大学や企業、県庁との連絡・調整に当たった。年度末にはプレゼンテーション会を開き、生徒が相互評価をすることになっている。

3年次では、1部・2部の成果を踏まえ、自己実現・進路実現のため、「倭」で培ったコミュニケーション力、思考力、表現力などを駆使し、小論文作成、面接演習等に取り組むこととした。

この取組は、生徒が奈良の課題を再認識するだけでなく、コミュニケーション力の向上と、的確な進路選択をする力を育成し、更に生涯にわたって学習意欲をもち続けることも意図している。

### (2) フレッシュマンミーティングの開催

入学予定者に対して、在校生が主体となった入学前オリエンテーションを企画し、実施した。3学期当初に在校生から希望者を募り、25名を選抜してコンダクターとして任命し、高校で学ぶ意義、社会人に向けて必要とされる力、礼儀作法などについて、2か月にわたる研修を実施した。入学式前の物品購入日に実施し、入学予定者のほぼ半数、約120名の参加を得て、様々な不安を抱える入学予定者の環境適応と、高校での学習への動機付けの一助となった。



この取組は、新入生の高校生活への適応をスムーズにするだけでなく、コンダクターとして活躍した在校生自身が、より愛校心を深め、学習意欲やコミュニケーション

力を高めるのに効果があり、それが学校全体に派生する効果も見受けられた。

### (3) 地域の中学生・保護者に対するキャリア講演会の実施

昨年度と今年度の2年間、地元中学校の4校より、進路講演会の講師として招聘され、キャリア教育の視点から、中学3年生とその保護者を対象に、学ぶ意義・高校生活・大学入試・就職に向けて必要とされる力など、将来に向けた意識啓発のための講演を行った。また、毎年7月には、帝塚山大学学園前キャンパスを借りて同様の進学ガイダンスを開催し、100～120名の参加を得ている。参加者からは、「単なる高校の説明会とは違う、視野の広い進路学習ができた」という評価を多くいただいている。

### (4) 資格・検定取得の取組

自主的に学ぶ姿勢と客観的な学力を身に付けるため、主に1・2年生を対象に語彙読解力検定・GTECを導入した。受検対策は、朝の学習時間（15分間）を利用して行った。受検は任意としたが、校内のムードづくりに努め、98%の受検率に至った。実際にこれらの実績を進路決定の際に役立てた生徒もいる。

### (5) ボケーションナルガイダンスの実施

職種は違っても、社会人として必要な素養が同じであることを知らせるとともに、今から身に付けておかなければならない力とは何かを生徒に理解させることを目的として、自らコーディネーターとなり、社会人講師をパネラーにディスカッションを行った。生徒・教員ともに、新鮮な気持ちで聞くことができたと好評であった。



### (6) 入学前教育プログラムの実施

大学進学希望者のうち、指定校推薦等で早期に進路決定した生徒を対象に、入学前教育プログラムを実施した。これは一般入試対策とは違った形で、大学進学に向けた積極的な学習態度と知識の向上を目指すものである。内容は、大学の履修や授業の様子を大学生を交えてのガイダンスを行ったり、大学の授業を想定した課題研究などに取り組み、プレゼンテーションを実施するものである。

## 2 成果及び課題

郷土を知り、郷土を愛し、グローバルな視点で郷土のよさを発信できる人材を育成することを目標とするだけでなく、社会人基礎力の育成を意識して、奈良TIME「倭」の実施計画を立て、スムーズな滑り出しに貢献できたことが成果としてあげられる。また、本校生のみならず、入学前生徒、中学生、保護者にもキャリア育成の視点からの進路についての考え方を説く場を設定してきたが、参加者からは、高い評価をいただいている。課題としては、大学をはじめとする各団体・社会人講師招聘のための企業との交渉と調整に手間と時間がかかることや、継続的により充実した内容にするための後継者の育成と、今後の成果の検証が必要であると考えている。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立登美ヶ丘高等学校ホームページ <http://www.tomigaoka-hs.jp/>